

湘南医療大学

ティーチング・ポートフォリオ

大学名 湘南医療大学
所 属 保健医療学部 看護学科
名 前 西口 碧斗
作成日 2026 年 4 月 27 日

1. 教育の責任

私は本年度より、湘南医療大学の看護学科、基盤共通看護領域に着任し、「人を尊び、命を尊び、個を敬愛す」の理念のもと、自身の臨床での経験を活かし、以下の科目について担当をしている。

「看護基礎ゼミ(必修:1年)」「看護学概論(必修:1年)」「ボランティア学(必修:1年)」「ナーシングスキル学Ⅰ(必修:1年)」「ヘルスアセスメント学Ⅰ(必修:1年)」「ナーシングプロセスⅠ(必修:2年)」「ナーシングスキル学Ⅱ(必修:2年)」「看護基盤実習Ⅰ(必修:1年)」「看護基盤実習Ⅱ(必修:2年)」「ヘルスプロモーション実習(必修:3年)」「統合実習(必修:4年)」

各科目において、看護を学び始めた学生が講義や演習、実習を通じて、単に知識や技術を身につけるだけではなく、「なぜその知識・技術が必要なのか」「知識・技術をどのように臨床で用いているか」といった、より実践的な学修ができるように支援を行うことが私の責務であると考えている。

また、科目担当以外に教務委員会に所属しており、学生の履修から単位取得に向けた支援、情報発信および情報共有を行い、大学運営にも努めていく。

2. 私の理念・目的

1) 私の理念

私の教育理念は、「学生が対象者を理解しようとする姿勢を基盤に、根拠に基づいて思考し、行動できる看護実践者へと成長できるように支援すること」である。

看護教育においては、知識や技術を習得すること自体が目的ではなく、それらをどのように考え、どのように活用するかを学ぶことが重要であると考えます。そのため私は、学生が学習内容を単に覚えるのではなく、「なぜその行動をとるのか」「どのような状況でその判断をするのか」といった問いを持ちながら学べるよう関わることを大切にしている。

特に重視しているのは、学生が自らの思考を言語化し、説明できるようになることである。説明できるということは理解が深まっていることを意味し、異なる状況にも対応できる力につながる。そのため、学生の発言や考えを引き出し、思考と行動を結び付ける支援を行いたいと考えている。

また、学生には対象者の立場に立って考える姿勢を身につけてほしいと考えている。看護は人と人との関係の中で成立するものであり、対象者の感じ方や安心感に配慮する視点が不可欠である。そのため私は、学生が「自分が受ける立場であればどう感じるか」を考えながら学べるような関わりを通して、対象者理解を深める教育を実践していきたい。

2) 理念をもつに至った背景

上記のような教育理念は、私自身の臨床および教育経験を通して形成されたものである。ICUでの臨床経験において、看護師には状況に応じた判断と迅速な対応が求められる

る一方で、知識や技術を有していても、それらを適切に活用できない場面を多く経験した。特に、手順としては正しく行えていても、その根拠や目的が十分に理解されていないことで、状況に応じた柔軟な対応が難しくなる様子を見てきた。この経験から、知識と実践をつなぐ思考の重要性を強く認識するようになった。

また、新人教育に携わる中で、単に行動を教えるだけでは学習が定着しにくく、思考を伴った理解が必要であることを実感した。学習者が「なぜそうするのか」を考えながら学ぶことで、より主体的に行動できるようになる姿を経験し、教育において思考を引き出す関わりの重要性を認識した。

さらに大学院での研究では、看護師のアイコンタクトといった非言語的コミュニケーションが対象者に与える影響について検討した。この経験を通して、看護においては言語化されにくい関わりも含めて対象者に影響を与えることを学んだ。同時に、こうした要素を学生が意識できるよう支援することも教育の役割であると考えられるようになった。

これらの経験を踏まえ、学生が思考に基づいて実践できる力と、対象者の立場に立ってかかわる視点の両方を育てる教育を行いたいと考えている。

3. 教育の方法・戦略

基盤共通看護領域における教育において、助手は講義補助にとどまらず、演習や実習を通して学生の学びを支える重要な役割を担っている重要な役割であると認識している。特に基礎段階では、学生が看護技術やコミュニケーションを初めて実践的に学ぶ機会が多く、その理解の深さや体験の質が今後の学習や看護観の形成に大きく影響する。そのため私は、学生一人ひとりの学習段階に寄り添いながら、思考と実践を結び付ける関わりを重視していく。

演習や実習においては、学生が単に手順をなぞるのではなく、「なぜその行動が必要なのか」「その関わりが対象者にどのように影響するのか」を考えながら実践できるよう支援することが重要であると考えます。また、初学者にとっては失敗や戸惑いが多い段階であるため、安心して試行錯誤できる環境を整えることも助手の重要な役割であると認識している。

これらを踏まえ、以下のような関わりを実践する。

・思考を引き出す関わり

学生の行動に対して「なぜそのように判断したのか」「他の方法は考えられるか」と問いかけることで、思考過程の言語化を促す。すぐに正解を示すのではなく、学生自身が考える機会をつくることを重視する。

・演習における即時的なフィードバック

技術演習の場面では、行動の良かった点や改善点を具体的に伝えるとともに、その理由を説明することで理解の深化を図る。特に、行動と根拠を結びつけたフィードバックを意識する。

- 対象者の視点への気づきを促す関わり

患者役の体験や振り返り場面において、「どのように感じたか」「どのような関わりが安心感につながったか」を共有させることで、対象者の立場に立って考える視点を育てる。

- 実習における思考支援

実習場面では、学生が状況をどのように捉えているかを確認しながら、「何を優先すべきか」「どのような情報が必要か」といった臨床推論を支援する関わりを行う。

- 個別性に応じた学習支援

学生の理解度や不安の程度に応じて関わり方を調整し、必要に応じて個別に声をかけることで、学習の停滞を防ぐ。質問しやすい雰囲気づくりを意識する。

- 学習環境の調整と教員間の橋渡し

学生のつまづきや理解状況を把握し、必要に応じて担当教員と共有することで、教育内容の改善や支援体制の調整につなげる。

- 教育実践の振り返りと自己研鑽

日々の関わりを振り返り、学生の反応や学習成果を踏まえて指導方法を見直す。また、FD 活動や文献学習を通して教育力の向上を図る。

以上のように、助手として演習・実習を中心とした教育場面において、学生の思考を引き出しながら実践につなげる関わりを行い、看護の基盤となる力の育成を支援していきたいと考えている。

4. 学習成果

本年度より着任したため、現時点では学生からの評価や教育活動の成果に関する十分な蓄積には至っていない。したがって、本項では演習・実習における関わりを通して期待される学習の変化や教育的効果について整理する。

- 演習において、学生が看護行為の手順にとどまらず、「なぜその行動が必要であるか」を考えながら実践しようとする姿勢が促されると考えられる。

- 思考発話を促す関わりにより、学生が自身の判断を言語化しながら理解を深めていく学習過程につながることが期待される。

- 患者役の体験を通して、対象者の立場に立ち、関わりを捉えようとする視点の形成が促されると考えられる。

- 非言語的コミュニケーションに着目することで、学生が自身の関わり方を振り返る機会が増え、看護の在り方を考える契機となることが期待される。

5. 改善のための努力

- 学生へのフィードバック方法、支援方法の改善

講義内におけるグループワークおよび演習・実習における学生の理解度や学習到達度、

準備段階に応じた助言内容やフィードバック方法を、文献や研修による自己研鑽、および先輩教員に相談し、助言を受け、継続的に改善を図る。

・主体性を引き出す支援方法の習得

学生が主体性をもち、自ら考え、行動につなげられるように支援するため、各学生の現状を把握するとともに、思考発話ができるようなアクティブラーニングやグループワークを通じて、学生の思考する力を伸ばしていく。そのための方法について文献や研修会による自己研鑽、および先輩教員からの助言を受ける。

6. 今後の目標

〔短期目標〕

- 1) 教育分野における文献検討、研修会の参加による自己研鑽を継続して実施し、学生へのフィードバック方法の確立を本年度内の目標とする。
- 2) 研究活動として、学会発表(10月中旬)および論文投稿(本年度中)をそれぞれ目標とし、査読者や他の先生方からの助言・指導を基に、知見や教育観を強化していく。

〔長期目標〕

学生の思考力を育て、臨床を見据えた知識・技術・態度を統合的に身につけられるような教育の実践を目標とする。